

Title	2つの大学を経験して
Author(s)	齊藤, 力
Journal	歯科学報, 109(5): 466-469
URL	http://hdl.handle.net/10130/1624
Right	

東京歯科大学創立120周年記念記事

「継承と発展」—各界の卒業生に聞く—

2つの大学を経験して

齊 藤 力

昭和47年卒業

新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻
顎顔面再建学講座組織再建口腔外科学分野

平成13年10月に学生時代から通算35年間にわたりお世話になった東京歯科大学を辞して、同年11月より新潟大学に赴任しました。新潟大学歯学部は昭和40年(1965年)に国立大学では日本海側唯一の歯学部として全国で三番目に設置されました。私の赴任した年に、教育研究組織を従来の学部を基礎とした組織から大学院を中心とした組織に変更するため、歯学部大学院歯学研究科は医学部大学院医学研究科と統合し「新潟大学大学院医歯学総合研究科」が誕生し、文部科学教官として同大学院医歯学総合研究科の教授となり、同時に歯学部の教授併任となりました。続いて平成15年10月には新潟大学医学部附属病院と歯学部附属病院の統合があり、大学の部局として23診療科と18中央診療施設からなる「新潟大学医歯学総合病院」が設置されました。さらに平成16年には国の方針にしたがって国立大学新潟大学は「国立大学法人新潟大学」に移行し、文部科学教官から国立大学法人の教員になりました。その後も歯科／口腔外科病棟の新病棟への移転、中央手術部門の統合など、きわめて短期間にめまぐるしい環境変化にさらされましたが、東京歯科大学在籍時代と比較をしつつ、新潟大学の現況と日常的業務について教育、研究、診療を通して報告させていただきます。

1) 教育について

平成16年に、超高齢社会を迎えようとするなかで、「食べる」ことや口腔機能の維持向上という観点から保険・医療・福祉を総合的に思考・マネジメントのできる専門家の養成を目的に、歯科衛生士と社会福祉士療法の資格取得ができる4年制の口腔生

命福祉学科が歯学部に新設されました。これに伴って歯学部は歯学科と口腔生命福祉学科の2学科制になりました。歯学科は1学年45名(内5名は3年次編入学生)で、歯学科学生教育の特徴は、①ゆとりある教養教育、②早期臨床実習として1年次からの養護・介護施設の訪問、医療現場を体験する実習や病院における歯科治療の第一線にふれる早期体験実習の実施によるモチベーションの高揚、③専門教育に関する授業科目を口腔生命科学総論及び各論、総合口腔生命科学の3つに統合・再編成し、それぞれの講義、実習を講義・実習コーディネーターを中心とした企画・立案、実行と、重複を避けた講義・実習の提供、④1年次から4年次までの語学教育実施、⑤実習科目の一部選択制、⑥学外研修施設での臨床実習を特色とするものです。

歯学部は平成18年度文部科学省事業の特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)で「学生主体の三位一体新歯学教育課程」が採択されました。これは歯科医師に求められる知識、技能、態度をそれぞれ関連づけて、効果的かつ一体的に習得することを目指すもので、①新歯学教育課程の特徴大学学習法(歯学スタディスキルズ)の実施による新教育課程への円滑な導入、②ステップアップ式の問題発見解決型学習法の展開(認知領域)、③旧来の科目の枠を廃した統合型模型実習の導入(精神運動領域)、④早期からの体験・思考型臨床実習などの実施(情意領域)の4つを特徴としています。

次に大学院学生教育ですが、平成17年に文部科学省の魅力ある大学院教育イニシアチブとして「留学生大学院教育の実質化による国際貢献」が採択さ

れ、「プロジェクト所属による大学院教育の実質化」が平成20年度文部科学省大学院教育改革支援プログラム(大学院GP)に採択されたのに伴い、教育プログラムの大幅な改変を行っています。すなわち、これまで大学院生に対する教育内容・方法は主として所属分野(講座)の指導教員に委ねられてきましたが、一方で臨床研修の必修化により大学院入学希望者の多くが臨床志向となり、大別すると①大学等の教育研究機関や国際・地域歯科保健機関で歯科医療・医学のリーダーとして自立を望む学生と、②臨床研修に継続した一般歯科医師とし必要な特定分野の教育を望む学生とになりました。そこで「科学的基盤をもち超高齢社会で指導者となる高度医療専門職業人の育成」を目指すために、大学院教育開発センターを設置して歯学教育の実質化を図り、①少人数の大学院生向けの新教育課程「リーダー養成コース」と、②従来型教育課程を基盤とした「主専攻展開コース」とに分けました。また大学院生の所属を各分野(講座)所属型から3大研究プロジェクトチーム所属型に移し、複数の指導教員による学際的教育を推進することとしました。両コースとも基礎学力と基本技術の養成を目指した初期教育課程(両コース共通)と、分野横断的(学際的)な講義・演習を展開する後期教育課程からなります。初期教育課程修了後に指導教員チームにより研究課題を決定したのち、大学院学生の希望と指導教員の協議により個別カリキュラムを編成します。講義・演習のカリキュラム編成の基本は基礎・臨床融合型で学際的教育内容とし、プロジェクト研究チーム教員が講義と演習を行います。さらに臨床実績評価のために、ケースごとのレポート作成を義務づけ、これを修了時の認定書授与の基礎資料として臨床能力を担保した認定書を授与します。さらにティーチングアシスタントやリサーチアシスタント業務を担わせ、教育・研究活動の実績を積むことによって教育・研究者マインドを洒養するプログラム、マネジメント・医療倫理・リーダーシップ・コーチングを主体するスキルアッププログラム、およびエクスターン支援プログラムを準備します。これらのプログラムによる蓄積ポイントにより学位論文を提出できる権利を獲得する Doctoral candidate 制度を導入し、Doctoral candidate は公開学位予備審査を経て、学外協

力者を含めた主査・副査による学位審査を受けることになります。この制度では教育課程上で3回の評価を受けることになります。このプログラムの特色は、①大学院教育開発センターによるカリキュラム開発、到達目標の設定、成績管理を含め大学院教育の一元管理、②学生の配属を教員個人の指導になりがちな分野所属型からプロジェクト所属とした複数指導体制による学際的教育の実施、③コースワーク、英語教育等の基礎教育の充実による基礎学力と基本技能の養成、④ティーチングアシスタントやリサーチアシスタントの経験、スキルアッププログラムや臨床実績をポイント化し、履修状況とともに判断し、学位論文を提出するための要件の規定(Doctoral candidate)、⑤センターのもとでの成績管理ならびに公開を原則とした学位審査の実施、⑥認定医・専門医資格取得のための高度な臨床技術のカリキュラム展開と実績による認定書の授与、⑦学務情報システム「学生カルテ」によるポートフォリオを用いた履修・習得状況の把握、などです。

このように研究を取り巻く環境も日々刻々と変化しております。

2) 研究について

新潟大学を中心とする「口腔からQOL向上を目指す連携研究」が平成20年度文部科学省の大学間連携特別教育研究経費(研究推進事業)として採択されました。これは7国立大学法人歯学部(新潟・岡山・広島・徳島・九州・長崎・鹿児島)の協力連携を大学レベルで推進することにより得られた歯学研究成果を、社会に還元して国民の口腔機能を維持・回復することを目的としており、大学間連携により効率的な研究を推進して第一線の教育研究者の集約的連携・融合分野への対応をはかり、研究成果を社会に還元して国民のQOL向上に寄与することを目指とするものです。本事業のカテゴリーは、①口腔環境制御研究、②咀嚼・嚥下機構研究、③再生工学研究の3つとし、私どもの分野から③の再生工学研究のカテゴリーに教員を配置し、後述の培養複合口腔粘膜移植による口腔機能再建に関する研究を推進しています。

私の所属する顎顔面再建学講座組織再建口腔外科学分野では、所属分野名の通り、「顎顔面口腔領域

の形態と機能の構築・再建」を研究・診療の大きな柱とし、以下の8項目について教員・大学院生が分担して研究・診療を行っており、「臨床に役立つ研究」を旗印としております。

組織再建口腔外科学分野での研究の概要を記述いたします。

(1) 組織工学的に作製したヒト培養骨・培養口腔粘膜の基礎的・臨床的研究

腫瘍切除後や外傷、あるいは補綴前外科において比較的大きな粘膜欠損が生じる場合に培養複合口腔粘膜移植を行っています。手術の4週間前に患者から米粒大の歯肉を採取し、口腔粘膜角化細胞を培養に移し、必要な面積に見合うまで角化細胞数が十分増えた段階で、ヒト新鮮屍体真皮(AlloDerm)の上に播きます。4日間培養液に浸しておき、5日目にこの材料を空気に触れさせ、7日目に患者の組織欠損部へ戻します。培養液中にはウシ由来の物質を含まず、マウスの細胞と一緒に培養されることもなく、安全性面でも汚染の危険性がない非常に優れた培養システムで、さらに細胞の凍結保存やヒト新鮮屍体真皮にかわる新素材の開発も企業と共同で行っています。現在、厚生労働省高度医療への申請を準備中です。

(2) 顎変形症の診断と治療に関する臨床的研究

顎変形症治療は矯正歯科と共同で行っていますが、治療成績の向上のために、顎顔面形態と口腔機能に関する研究を行っています。形態に関しては、コンピュータを用いた手術前後の顎顔面形態を三次元的に分析・評価を行い、口腔機能に関しては手術前後の咬合力の改善度を定量的な計測・評価のみではなく、術後の咀嚼能力をはじめとする各種口腔機能向上のための研究を行うとともに、顎顔面形態の評価にアイトラッキング法を用いた認知メカニズムの研究を推進しています。

(3) 顎変形症ならびに口唇口蓋裂患者の心理学的研究

顔面は身体の中で最も注目される部位であることから、顎変形や先天異常に伴う口唇・鼻の変形は、自信喪失や社会的適応の低下ならびに心理的障害をきたしやすいといわれています。また顎矯正手術や口唇外鼻修正手術は良好な咬合状態と顎顔面形態と口腔機能を獲得させる手術ではありますが、患者の心

理面にも良い影響があらわれるといわれています。そこで顎変形症や口唇口蓋裂患者に複数の心理テストを行い、その心理学的特性を把握するとともに、心理的な諸問題や手術前後の変化を解明することにより、個々の患者に合わせた心理的サポートのできる治療システムの確立を目指しています。

(4) 口腔がんの診断と治療に関する基礎的・臨床的研究

口腔がんの治療成績は向上していますが、依然として進行がんの治療成績は不良です。その大きな要因は局所および頸部再発と遠隔転移であり、これらの問題を解決するために口腔がんの診断と治療、浸潤・転移に関する臨床的および基礎的研究を行っており、特に予後に関与する臨床的、病理組織学的および分子生物学的因子の同定、標準的治療、形態と機能の保持を目指したがん治療、がんの化学予防、リンパ節転移の免疫組織学および分子生物学的機序などについて力を入れています。口腔がんの浸潤・転移に関する基礎的研究として、リンパ管新生因子、血中腫瘍細胞、センチネルナビゲーション手術などに関する研究を行っています。

(5) 閉塞型睡眠障害の診断と治療に関する基礎的・臨床的研究

診療は当院ならびに近隣病院の呼吸器内科とネットワークを構築しており、日本人における本疾患の特徴について形態学的に検討するとともに、顎矯正手術前後の呼吸変化をはじめ本疾患に対する外科的療法の有意性、口腔内装具の治療効果と適応症について検討しています。

(6) 歯の移植に関する基礎的・臨床的研究

平成4年から歯の移植を行っており、現在は平成12年に特殊外来として開設された「歯の移植外来」で、年間60例以上の歯の移植を行っています。移植歯の歯根表面の性状と経過、移植後の根管治療と歯根膜治癒との関係など、予後因子についての臨床的統計的検討を行い、治療方法の確立に努めています。しかし大部分は即時移植であり、適応症に制限があるため、これを解決するために凍結保存歯移植に関する研究を行っています。ラットの実験で凍害防止剤の使用と緩速凍結により、凍結保存歯も即時移植歯と同様に歯根膜再生が確認されており、さらには凍結保存温度・期間が歯根膜再生に及ぼす研究

では、開業歯科医院での凍結保存歯移植実施の可能性に関する研究も行っています。この凍結保存歯移植はすでに臨床応用を開始しております。

(7) 骨延長法ならびに骨移植術に関する基礎的・臨床的研究

骨延長法は顎顔面口腔領域で広く応用されるようになり、下顎骨、上顎骨や歯槽骨を延長するための様々な延長装置が開発され、その適応症も拡大してきています。平成13年に口腔外科に「顎堤形成外来」を開設し、顎変形症のみならず顎骨再建や低歯槽提症の顎堤形成、癒着歯の矯正治療にこれを導入しています。動物実験モデルを用いて顎骨延長のメカニズムや様々な骨形成促進法についての検討を行って、臨床にフィードバックしています。

(8) 口腔顎顔面インプラントによる口腔機能再建に関する基礎的・臨床的研究

歯科インプラントは歯の欠如に対する補綴的治療の一選択肢として定着していますが、顔面口腔領域の腫瘍切除後あるいは外傷後の組織欠損や、先天異常に対して口腔機能と形態の再建、修復ないし構築に応用していますが、その応用範囲拡大を目的として基礎的・臨床的な研究を行っています。すなわち基礎的研究としてはインプラント埋入のための骨延長ならびに再生骨応用に関する研究、インプラントの埋入部位・本数が再建顎骨に及ぼす影響に関する力学的研究などを、また臨床的研究としてインプラント義歯装着前後の咀嚼機能評価などを行っています。

3) 診療について

新潟大学医歯学総合病院は810床の特定機能病院ですが、平成21年10月には中央診療棟の移転と全国で23番目に認可された高度救急救命センターとして「高次救命災害治療センター」が開設されましたが、これは新潟県でおきた2回の大地震の教訓から設置されるもので、佐渡島を含めた新潟県全域が医療圏になります。歯科系診療部門は4診療科編

成となっており、外来には一日平均600余名の患者が訪れています。私の所属する口腔再建外科診療室は、顎顔面外科、歯科麻酔科および歯科放射線科各診療室とともに「口腔外科」にあります。来院患者は新潟市内をはじめ、県内全域、近隣の富山県、山形県、群馬県、長野県や都内からも来院しています。歯科系診療部門には180台の診療ユニットがあり、日常診療業務、学生の臨床教育および臨床研修歯科医師の教育・指導が行われています。また歯科／口腔外科病棟は40床で12階建て病棟の4階にあります。同じ口腔外科の顎顔面外科診療室とは疾患のすみわけをしつつ、口唇口蓋裂などの先天異常、顎変形症、腫瘍、嚢胞、炎症、外傷ならびに口腔顎顔面インプラントに関連した外科的治療など、顎顔面口腔領域の全ての疾患の診断と治療を行っています。また口腔外科には特殊外来として、いびき外来、顎堤形成外来、歯の移植外来および口腔腫瘍外来が開設されており、症例の管理一元化を行っています。中央手術室における歯科／口腔外科の手術は年間約600例で、全身麻酔が4日／週、局所麻酔が1日／週で、いずれも歯科麻酔科の管理下に行われています。

私の所属する組織再建口腔外科学分野は現在、教授1名、准教授2名(内1名は病院地域保健医療推進部所属)、講師1名、助教6名(医歯学系4名、病院2名)、特任助教1名、医員7名、レジデント2名の他、大学院生9名、研究生7名、登録研修医3名、長期出張4名で構成されており、少人数編成ながら、教育、診療、研究に相互協力しつつ日常業務を行っております。周りのほとんどが同窓という環境から全く別の環境へ移りましたが、東京歯科大学で培われた精神を基本に、また東京歯科大学の動向も注視しつつ、私のアイデンティティである「臨床の実践」を通して社会貢献を果たしたいと考えております。